

第10回 肢体不自由療育セミナー from 北海道 開催要項

テーマ “今、人間科学としての療育・保育・教育・小児セラピーに大切な観点”

学校や保育園で起きたマルトリートメント（不適切な指導）について見聞しますが、これは身体的および精神的な暴力等だけに限られていません。指導者側が子どもに見合わない高い目標や低い目標を設定し、子どものできない姿や興味を持たない姿を見た時に叱る、身体的な拘束をするなど、「大人が子どもを支配する行為」も含まれています。叱ることや身体拘束などは論外ですが、指導者側の「適切ではない目標設定」という点では、私たちの療育や小児リハビリの場においても、他人事ではないように思います。

子どもは信頼できる大人や友達との関係の中で様々な経験を積み、心の正負の動きを内包しながら育っていきます。しかしながら、私たちが関わる子どもたちは、「障害」から生じる「制約」と、その子の発達水準からの制限（これは障害の有無に関わらず生じる制限）から上述した育ちが難しい状況にあります。私たちは、それらの実態を把握し、「障害」から生じる「制約」の軽減を図りながら、その子の発達水準に着目した指導・支援目標を立て働きかけて行くことを専門職として行っています。

現在、「児童発達支援ガイドライン」で個別の支援計画の作成のため「5領域」が示されています。この5つの領域は子どもの全体的な発達を促すために提示されていますが、これらは「実証科学」で明かされたものであり、「実証科学」の対象とならない目に見えない感情や思考の分野などは挙げられていないのです。日常、子どもも私たちも主観的な生活の世界で暮らし活動していることを考えると、客観的に示された領域だけでは具体的な生活や活動の目標を考えることは容易ではなく、目標を立てるとしても何故か子どもたちの「息づかい」や「笑顔」など生身の姿が消えてしまいます。「カーテン開けずに 雨雲レーダーで空を見る」、これは NHK ラジオ番組「あとは寝るだけの時間」で紹介された自由律俳句ですが、客観と主観の関係をよく表しているのではないのでしょうか。客観と主観のどちらかだけ選択するのではなく、また子どもを客観的な対象としてだけ捉えるのではなく、指導者との相互作用の中、主観的な世界で展開されるものであることに留意する必要があると考えます。

今回はこれらの課題に応える内容ですので、参加者の皆さんの実践や臨床に多くヒントの図られる機会になると考えています。

記

- 1 日 時 2026年11月28日（土） 9：00～17：45（受付8：30～8：50）
11月29日（日） 9：00～12：10（受付8：30～9：00）
- 2 会 場 北海道文教大学 鶴岡記念講堂 （北海道恵庭市黄金中央5丁目196-1）
- 3 主 催 北海道肢体不自由療育セミナー開催実行委員会
- 4 協 賛 鶴岡学園 北海道文教大学
- 5 後援・協力 北海道小児理学療法研究会、北海道感覚統合研究会、北海道自立活動教諭研究協議会、
全国障害者問題研究会千歳サークル、ちとせ児童発達支援センターはる

6 日程・内容

<1日目>

9：00 9：10

12：00 12：45

15：30

17：45

受付	開会式	<講座1> “看護・ケアの現象学から学ぶ： 現代の学問研究の危機と 人間科学の課題” 講師 榊原 哲也氏 （東京大学名誉教授）	昼食	<講座2> “ヴィゴツキーとレリヤの発達論と 障害児・者の研究について” 講師 佐藤 公治氏 （北海道大学名誉教授）	<講座3> “「うごく」は「まなぶ」こと、 そして「つながる」こと” 講師 高塩 純一氏 （びわこ学園・理学療法士）
----	-----	--	----	--	--

<2日目>

9：00

12：00 12：10

受付	<講座4> “「共事者」として、 子どもを主体として心を育てるとは” 講師 鯨岡 峻氏 （京都大学名誉教授）	閉会式
----	--	-----

<1日目> 開会式 (9:00~9:10)

● 講座1 (9:10~12:00)

座長 石岡 卓氏 (ちとせ児童発達支援センターはる 副施設長/当会事務局長)

子どもの指導やセラピーなどを考える時、多くの場合「実証科学」を基盤に作られ示された理論や方法、指導要領や指針を基に、指導やセラピーを考え組み立てていることが多いのではないのでしょうか。例えば児童発達支援のガイドラインでは「5領域」が、また、特別支援教育では学習指導要領の中に、自立活動の「6区分27項目」が示され、選択し具体的な支援や指導の目標設定することになっています。しかし、挙げられている領域や区分は、数量的な研究である「実証科学」で明らかにされてもので、数量研究では対象にならない「気持ち」や「心の動き」など目に見えない感情や思考の分野は提示されていないこととなります。つまり、示されている領域や区分だけでは、子どもの姿のすべてを包括してはいないこととなります。

子どもも私たちも主観的な生活世界で暮らし活動していることを考えると、客観的に示された領域だけでは具体的な生活や活動の目標を考えることは容易ではありません。だからと言って客観的に示されていることを全面的に否定するのは正しくはありません。さて、そのためにはどのように考えるべきなのでしょう。今回は、看護・ケアの現象学的考察を基に、現在の「実証科学」の問題と「主観と客観」の関係、そして「人間科学」である私たちの実践や臨床においても活かせるお話をしていただきます。

○ 講演 (9:15~10:45)

演題『看護・ケアの現象学から学ぶ：現代の学問研究の危機と人間科学の課題

—子どもの経験世界を理解する視点—

講師 榊原 哲也氏 (東京女子大学教授・東京大学名誉教授)

○ 質疑・応答 (11:00~12:00)

コメント/クエスチョナー：・土畠 智幸氏 (医療法人稲生会 理事長 / 医師)

・花井 丈夫氏 (横浜 能見台こどもクリニック 理学療法士)

・福島 久子氏 (北海道手稲養護学校 看護師)

昼食・休憩 (12:00~12:45)

● 講座2 (12:45~15:15)

座長 二通 諭氏 (札幌学院大学大学名誉教授)

世間では、学習は「個人の活動」であり、その努力の目標は知識や技能を「自己責任」で身につけていくことであると認識されているようですが、そうなのでしょう。私たちが関わる肢体不自由などの障害がある子どもたちを考えると「個人で」また「自己責任で身につけていく」ことは大変困難なことであり、また、実際に保育・教育はもちろん、療育や小児セラピーの「場」での子どもたちとのやり取りを考えると、違和感を持たざるを得ません。ヴィゴツキーは、「子どもは他者との関わりを通して発達する」と述べるとともに、「教育は子どもの“現下の発達水準（自力でできる範囲）”ではなく“発達しつつある水準（適切なサポートがあれば達成できる能力の範囲）”に基づいて行われるべきもの（発達の最近接領域）である」としています。そのためには、「子どもの発達の可能性という観点から、個人の発達水準の評価すること」、「教師や仲間との社会的相互作用による学習」、そして「発達促進するものとしての“ごっこ遊び”など模倣を伴う活動」、この3つの観点が重要であるとしています。これらは、保育や教育の分野に限らず、療育や小児セラピー(リハビリ)においても、重要な内容であると言えるのではないのでしょうか。今回は、昨年の講座でコメント/クエスチョナーをお願いした佐藤先生を講師として招き、ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」と発達論等の他、ルリヤの失語症と神経心理学の研究についても、お話をしていただきます。

○ 講演 (12:50~14:20)

演題『ヴィゴツキーとルリヤの発達論と障害児・者の研究について

—ヴィゴツキーの「発達の最近接論」・模倣論にみる主体性の考え方とルリヤの神経心理学の研究—

講師 佐藤 公治氏 (北海道大学名誉教授)

○ 質疑・応答 (14:35~15:15)

コメント/クエスチョナー：

・浜田 寿美男氏 (奈良女子大学名誉教授・立命館大学上席研究員)

・花井 丈夫氏 (横浜 能見台こどもクリニック 理学療法士)

● 講座3 (15:30~17:45) 座長 佐藤 一浩氏 (札幌緑花会 緑ヶ丘療育園・理学療法士)

ここに1冊の本があります。昨年10月に出版された『Funから始まる・Funが育む 障がいや病気のある子どもの支援-うごく・まなぶ・つながる-』(編集 船橋篤彦 他 北大路書房)です。

この本では「Fun」について、「楽しいこと」とすれば子どもを楽しませることが大切というメッセージになってしまします…それは編者の意図するものではない」とし、「Funは与えられるものではなく」「興味を持つ」「発見する」「気づく」そして「気がついたら夢中になっている」といった子ども側に開かれたもの」と、「Fun」の内容を語っています。講師の高塩氏は、第1部第1章で「リハビリテーションにおけるFun-動くは学ぶこと-」と題し、これまでの「Fun」に着目したセラピーの取り組みを述べています。そこでは、子どもたちの発達や身体の状態を捉えた上で、心の動きに着目しながらの臨床場面での実践が展開されています。着目すべき、「Fun」を大切にできる様々な機器類をアクティビティ(まさに教材!)を開発・提供し、一方向のセラピーではなく、間主観的に指導する側も子ども達と「Fun」を共有する中で、子どもたちに変化が生まれていることです。また、「支援とは一方通行の行為ではなく“共に生きる”ことそのもの」と述べ、支援側の立ち位置を「中動態の私」とし「“支援される側/される側”といった固定的な関係性を超え、互いに影響を与え合いながら生きていくあり方が必要」としています。今回のセミナーの各講座を内包したような実践となっているように思えます。講演後の質疑・応答で更に楽しく深めたいと思います。

○講演 (15:35~16:45)

演題『「うごく」は「まなぶ」こと、そして「つながる」こと

-リハビリテーションでの「Fun」を考える-

講師 高塩 純一氏 (びわこ学園医療福祉センター草津 理学療法士)

○質疑・応答 (17:00~17:45)

コメント/クエスチョナー

・土岐 めぐみ氏

(札幌医科大学医学部 リハビリテーション医学講座 / リハビリテーション医師)

・横井 裕一郎氏 (北海道文教大学学部長・教授 / 理学療法士)

<2日目> 受付開始 (8:30~9:00)

● 講座4 (9:00~12:00)

座長 今野 邦彦氏 (藤女子大学教授/当会代表)

マルトリートメントという言葉聞いたことがあるでしょうか。これは「大人が子どもの健やかな育ちを妨げる“避けたい関わり”」全般を示す呼称で、これは家庭だけではなく教育や保育、療育や教育現場でも起こり得る問題であります。例えば、指導者側が子どもの実態に見合わない目標を立て、できない場合に叱る、また子どもの自由な時間を奪うなど大人が子どもを支配する行為も該当するのです。

さらに、教育現場では不登校、それに類する行き渋り、教職員疲弊と休職離職、目に見えない形でのいじめの増加などを見聞します。これらに類する事態は、保育や療育機関などでも起こっていることではないでしょうか。

さて、日々の支援や指導、そしてセラピーの中で、子どもの困った行動や態度、発言などを目の当たりにしてどのように対応するのか、対応した中味が適切だったのかなど悩むことがあるのではないのでしょうか。これまでもセミナーでは、鯨岡先生から「養護の働き」と「教育の働き」、「私は私」と「私は私たち」など、指導者側の支援の観点や子どもたちの「心の動き」について学んできましたが、今回は、さらに「当事者」である子どもたちと育ちを共にする「共事者」として私たちの視点、また、保護者や信頼する保育士など「重要他者」との関係の中で纏められていく「自己態勢」についてもふれていただき、再度、「子どもの主体として心を育てること」の大切さについて、途中休憩を挟んでお話していただきます。

○講演 (9:05~9:45、9:55~10:45)

演題『「共事者」として、子どもを主体として心を育てるとは

-養育・保育・教育・療育・研究に携わる皆さんへのメッセージ-

講師 鯨岡 峻氏 (京都大学名誉教授)

○質疑・応答 (11:00~12:00)

コメント/クエスチョナー:

・浜田 寿美男氏 (奈良女子大学名誉教授・立命館大学上席研究員)

・宮原 順寛氏 (北海道教育大学大学院 准教授)

● 閉会式 (12:00~12:10)

7 定 員 120 名（定員になり次第、受付を閉じますのでご注意ください）

- 8 参加費 一 般：両日 10,000 円、1 日目参加 8,000 円、2 日目参加 4,000 円
 後援団体会員：両日 9,000 円、1 日目参加 7,000 円、2 日目参加 3,000 円
 学 生：両日 5,000 円、1 日目参加 4,000 円、2 日目参加 2,000 円
- *参加費の振り込み先の銀行口座については、参加申し込み後にお知らせいたします。
 - *参加費は、申し込み後、2 週回以内に入金をお願いいたします。
 - *入金後のキャンセルによる返金はできませんのご承知置きください。
 - *協賛団体である北海道文教大の学生・大学院生・教職員の参加は無料（申込み必要）です。
 - *締め切りは 11 月 14 日（土）までです。

9 申込み方法 下の URL か、左の QR コードからお申込みください。
 必ず e-mail アドレスの記入をお願いします。



*上述しましたが、申し込み後、2 週間以内に参加費の振り込み願います。

<https://forms.gle/QxBpjcrZKhQMLWjN6>

* 問い合わせ先：seminar.youiku@abauone-net.jp（メールにてお願いします）

10 懇親会について

1 日目の 28 日（土）18：30 から、千歳駅周辺で講師を囲んでの懇親会を開催します。
参加費は 4,000 円です。限定 15 名ですので早めにお申し込みください。

11 注意事項

- * 発熱がある場合、発症して 5 日間を経っていない場合は参加をご遠慮ください。
- * 駐車場は無料ですが、職員専用の駐車場は使用せず、一般駐車場を利用してください。